

看護教育DX化と学習効果に関する 基礎的研究

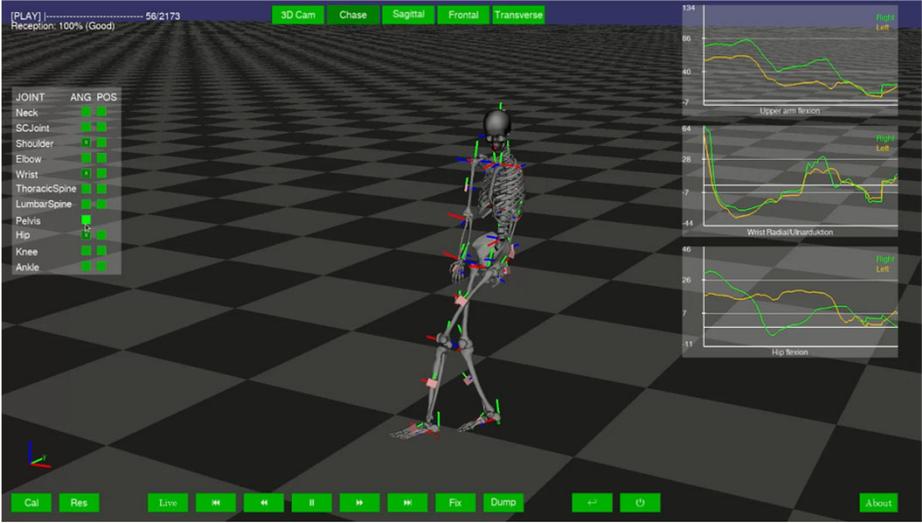
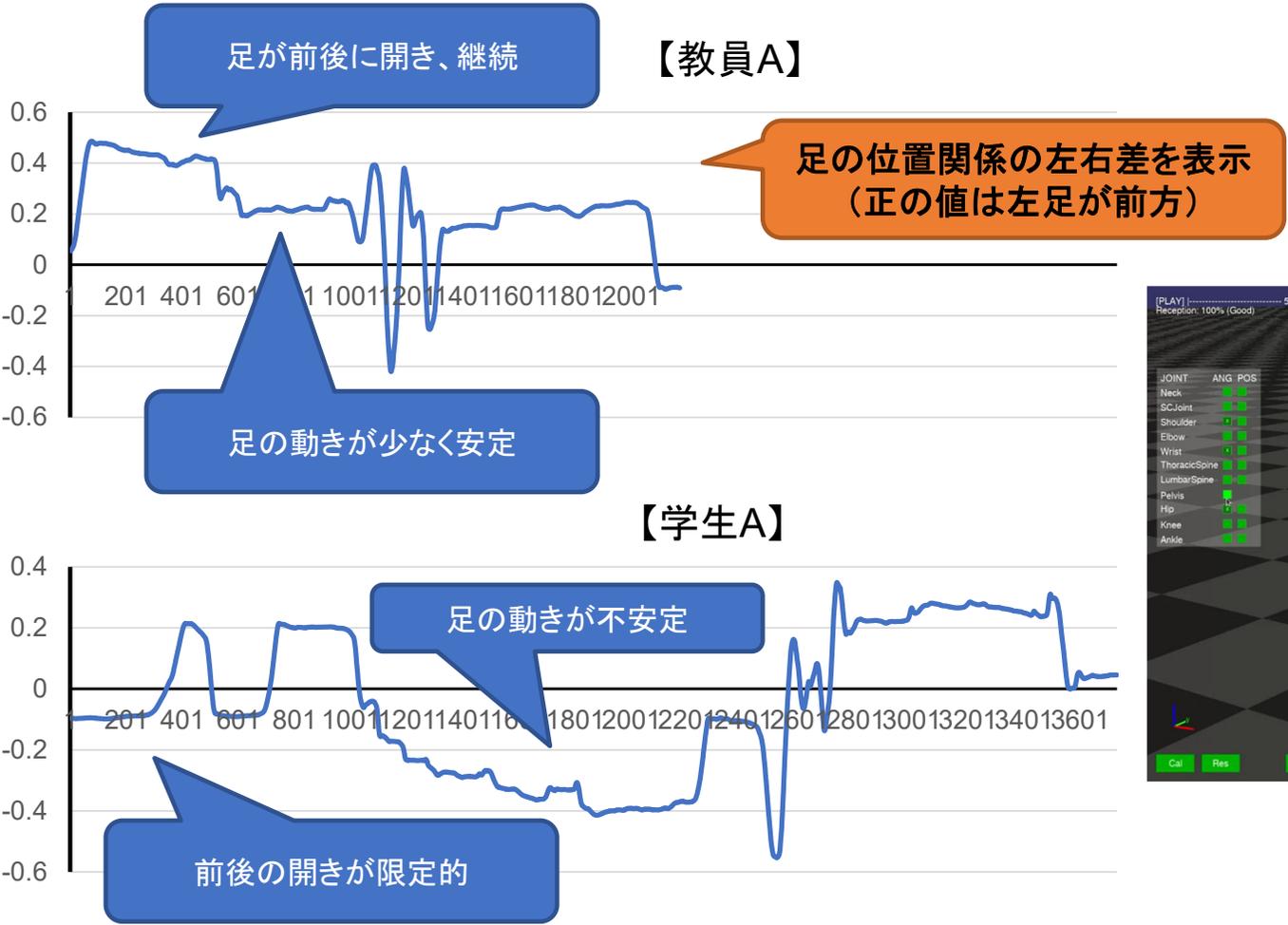
<研究者>北澤健文(代表)、川内健三、杉田理恵子、柳田真季子
一柳由紀子、鈴木晶子、山口佳子、鈴木幹子

東京家政大学ヒューマンライフ支援機構
プロジェクト研究助成費

研究背景

1. 看護学生の実習において、既習の知識・技術を対象者への看護技術に反映させることができていない場面が多々あり、教育上の課題となっている。
2. 基礎看護技術を学修する1、2年次から系統的に対象者の安全・安楽に配慮したケアの技術や、視覚情報を収集する技術をトレーニングする必要がある。
3. こうした教育上の課題を解決する一つ的手段として、デジタルデバイスを用いて学生の技術習得を向上させる新たな教材を作製し、それらを統合した教育プログラム／パッケージの開発を試みた。
 - 3.1. センサースーツを用いた教材の作製
 - 3.2. 視線解析装置を用いた教材の作製
 - 3.3. デブリーフィングシステムを用いたグループワーク
 - 3.4. 作製した教材の教育上の効果検証
 - 3.5. 教育プログラムとしてのパッケージ化

データ計測の例：センサーズーツで計測した足先の動きの違い



DX導入型教育プログラムの例

例えば、「ベッド端坐位から車いすへの患者の移乗」をテーマとする場合、

- ① 教員が行う動作について、Talk Eye Liteによる視覚情報と、頭部および全身のモーションキャプチャデータを測定する。また、その際に、2台のカメラで動画を撮影し、デブリーフィングシステムで記録する。
- ② ①のデータを適宜提示しながら、移乗動作におけるポイントを教員が講義する。
- ③ ②ののち、授業中に、学生の動作について視覚情報データおよび身体運動データを計測し、その様子をデブリーディングシステムで記録する。
- ④ 教員は測定したデータを学生提示用教材として準備する。
- ⑤ 視覚データとモーションキャプチャデータについて、①の教員データと②の学生データを提示し、両者の相違点、課題、改善策について、学生個々に考える。
- ⑥ デブリーフィングシステムで記録した①の教員データと③の学生データを提示し、両者の相違点、課題、改善策について、少人数によるグループワークでディスカッションを行う。教員はディスカッションに参加し、ファシリテートや助言を行う。
- ⑦ ⑤、⑥の結果を学生個々にまとめる。
- ⑧ 学生は⑦の結果をふまえて、小グループで動作の演習を行う。

なお、学生データの計測について、少人数形式でプログラムを実施する場合は全員分の計測を行い、100名前後の集団形式で実施する場合は、学生代表者について計測を実施する形態がありうる。